

グローバル化時代の日本語教育

—文化のマイクロ・レベルに焦点を合わせて—

Peter Ackermann

Japanese Studies, University of Erlangen-Nürnberg, Germany

1. 問題提起

グローバル化という現象は古くから存在する。古来より新技術や製造法、健康管理に関する知識、さまざまな信仰などは地球上を駆けめぐり、広く世界に普及した。しかし、現在進行中のグローバル化には今までなかった要素が見うけられる。現代のグローバル化の特徴は、特定の地域の文化や伝統を無視して、しかも地理的距離とは殆ど無関係に、一番安く、一番早く、一番効率的に物やサービスを提供するための組織同士の競争であることだと言えよう。情報工学の目まぐるしい進歩による情報量の爆発的な増加は、これらの情報の消化を強いられる受容者の立場を無視するのみならず、量の尺度のみで測られる情報分配の効率化を結果としてもたらした。このようなグローバル化の進行によって個々人の母語や文化的背景を重視することが困難になってきている。世界共通の評価制度が急激に導入されつつある現在、世界共通に通用する言語が要求され、共通語としての英語の使用が次第に普通になっている点は見逃せない。さて、グローバル化の進行がもたらすこのような変化の中で、限られた地域でしか通用しない、しかも習得するには非常に時間がかかる日本語のような言語を学習することに果たして意味があると言えるのだろうか。

2. マイクロ・レベルの認識

議論の端緒として、世界中の大きな言語圏において「大きい」言葉に対置する「小さい」言葉が存在し、それぞれの言葉が使い分けられているという事実を指摘したい。例えば、オランダでは英語が使いこなせない人はいないだろう。その一方、他国では通用しないオランダ語も、日常生活は勿論、学術論文においてさえ使われていないわけではない。また、日本では、京都の言葉、あるいはグループ別の若者言葉などが標準語と共存していることは見逃せない。一方、私の故郷であるスイスでは、標準ドイツ語は書き言葉として使われていても話し言葉としては全く使用されていない。日常会話はすべてアレマン語といわれるドイツ語で行われている。私自身が「大きい」言葉と「小さい」言葉、「大きい」世界と「小さい」世界の相互関係や、この両者の特徴に強い関心を抱くようになった背景にも、故郷スイスの言語状況という個人的な事情が関与していることは否定できない。

以下の議論の中で、私は日本語をあえて「小さい」言語（マイクロの世界の言語）と位置づけてみようと思う。勿論、日本語が一億人以上の人間の母語であるのみならず、上古の時代から文学・論文・思想体系など、数え切れない貴重な資料を生み出してきたことは十分に承知している。しかし、冒頭に述べたグローバル化という時代背景を考えると、日本語を「大きな」世界の中に位置する「小さな」世界の言葉として理解することが許されるのではないか。このような視点に立てば、日本語のような比較的「小さい」世界の言葉を習得しても、投入する労力の大きさの割にはわずかな小さな情報しか得られないではないかという、効率主義者からの批判に反論するのが如何に困難であるかが理解できるだろう。ドイツに留学した日本人学生は、「なぜドイツ語を学ぶエネルギーを英語のマスターに使わなかったのか」という批判を受けることがある。また、日本の大型書店へ足を運べば一目瞭然であるように、英語で書かれた日本関連の出版物も急激に増加しつつある。グローバルな世界では、こうした出版物から得られる情報で間に合うのではないかと思われがちである。従って、我々ヨーロッパ人は、「英語ができる日本人が十分いるのに、なぜわざわざ日本語を習得する必要があるのか」という、厳しい質問に直面することが度々ある。

このような問題から明らかになってくるのは、マクロの世界（たとえば世界政治・経済・金融・教育制度など）に対置するものとして、マイクロの世界の有り様と独自性を把握することの必要性であり、また、マイクロの世界の中のマクロ・レベルに対置するマイクロ・レベル（個人・小集団・地域など）の有り様と独自性を把握することの必要性である。マイクロで「小さな」世界、「小さな」言葉とは何を意味しているのか、また、どのような性格と特徴を持っているのか、それを究明することによって何が得られるかを明確に認識する必要がある。言葉を変えれば、マイクロの世界でどのような情報をキャッチしたいのか、ということをも具体的かつ慎重に考えなければならない、ということになる。

3. 言語習得と文化論の絡み合いの問題

マイクロの世界の言語というのは、原則として *lingua franca*（共通語）とは異なり、具体的な社会心理的背景を強く反映し、ある特定の小文化の伝統、歴史、価値観などを極めて高い程度で表していると言えよう。いやそれどころか、マイクロの世界の言葉は、小文化の個性と独自性を強調（場合によって誇張）し、相手に認識させる役割を果たす場合が少なくない。しかし、高度な効率化が求められると、マイクロの世界の文化的個性と独自性は見逃され、図式的な文化論資料のみを用いた概括的な議論しか行われなくなる。日本語・ドイツ語などの言語教育の分野においても、このような図式的文化論のアプローチでは、一つの国には一種の「文化的本質」があるということが想定される。ここで問題になるのは、このような本質を強調する *essentialism*（本質主義）の立場がマイクロ世界の言語習得を無意味にしてしまうという点である。マイクロ世界の言語を習得するということ

は、その文化に内在している変化、不安定要素、対立、矛盾、葛藤など、また、その多様性や流動性こそを把握するに足る能力を身につけるということを意味している。

ここでは二点において再認識が必要であることを主張したい。第一には、lingua franca でない、つまり、通常、文化と文化の間のコミュニケーションに使用されない言語の特質はどのようなものであるかについての再認識、第二には、マイクロの世界の中で言語と文化の流れがいかに関わり合っているかについての再認識である。また、言語が文化と切り離して考えられないものであるならば、「小さい」言語の学習にあたって「教育の目標」をどのように設定すればよいのか、という問題の重要性を指摘したいと思う。

4. 言語と文化の関係 — 文化人類学の観点から

世界の政治・経済・社会に関する主なデータのみを重視して、特定の地域文化と強く結びついている言葉まで習う必要はないと考える人は増えつつあるだろう。欧米の大学では、言語学習を邪魔だと思い、外部委託してほしいと考えている人も少なくない。また、「文化の本質」とみなされている特徴のみを効率的に列挙する教育者も増加の傾向にあると思われる。この二点に対して、文化人類学者の一部は非常に大きな不満を抱いている。

文化人類学は、マクロ・レベル、すなわち社会（政治、経済、産業、宗教、法律など）の仕組み、また、自然、空間、時間、歴史などの大きな単位に対してマイクロ・レベル、つまり個人とその具体的な行動や思考を区別して取り扱う。そして、その二つのレベルの相互作用を認識するために人間に固有の特性に留意すべきだ、と主張する。つまり、① 人間には主観性がある、② 人間は自分の身体を意識している、③ 人間は「社会」を形成しており、社会のルールと個人の認識は相互に作用している、④ 人間は時間の流れを知っており、過去、現在、将来を意識しながら過去のことを将来のために伝承する、⑤ 人間は世界のさまざまな現象に意味を与えると同時に、さまざまな現象を解釈しながら人生の行路を決める(Bilstein/Liebau 2003)。

これら5つの特性を考慮すると、人間は必ず自分より「大きい」ものとの対立関係に置かれており、自然（身体）、社会、時間、空間、宗教など、個々人の外側にある、自分の意志力では完全に統制できないものに直面しているということが分かる。自分の身近な環境に与えることができる影響がどんなに大きいとしても、その身近な環境の外側に必ずもっと大きなマクロ・レベルが存在し、それをある程度受け入れざるを得ない。このような受け入れのプロセスと方法を「対処戦略」(coping)と名づけることにしよう。

一つの対処戦略はコミュニケーション行動である。その中で、自分が直面している個人的現状と、その外側にある現状の間のテンション（緊張）を、たとえば討論・議論・独り言・

提案・電子メールなどで緩和しようとする意志は強く機能している。人間のコミュニケーションには非言語行動、特に感情に左右される行動の比重が大きいということを考え合わせると、怒り、攻撃的または威圧的な態度、あるいは逆に不安、恐怖、不満などを表す態度も、対処戦略として認識することは非常に大切である。

5. マイクロ・レベルとマクロ・レベルの間の緊張関係に対して個人の取る対処戦略

人間が自分の気持ちを一番正確に表すことができる言葉、地域の言葉、あるいは方言に耳を傾けて、話者が用いるさまざまな工夫や戦略に注目すると、表面的な観察だけでは把握不可能なプロセスが見えてくる。こうした「小さな言葉」には、社会的存在である個人が感じている各種の緊張や、またそれらの緩和を目的とした思考・行動が現れているからである。私は、このマイクロ・レベルこそが上述した5つの「人間」の特性を生かす次元であり、「文化」というものの核心をなすものと考えている。

以下では2つの例を取り上げ、マイクロ・レベルとマクロ・レベルの間の緊張関係に置かれた個人がどのような対処戦略を遂行するか、その仕組みを異文化間コミュニケーションの観点から論じてみたいと思う。

5.1 社会の変化によって生じる精神的緊張

5.1.1 問題の所在

1960年代の日本社会（特に、社会的地位の向上を目指す中年前期の年齢層）において支配的だった人生観は、「努力奮闘によってよりよい生活を築こう」、または「世界一の経済大国を目指せ」といったものだった。また、この頃の若い世代の生活環境は比較的素朴で、昔ながらの小さな和式家屋に住んでいる人が多かった。この時代においてはまだ、子供たちが行儀、礼儀などの社会のルールを隣近所の「雰囲気」を感じ取ることによって習得することが通例であった。従って、このような生活環境の中で身につけた価値観と人生観を次の世代に伝えようとする1970/80年代の親たちと、時代の流れに沿って急激に変化する環境がもたらした新たな問題に取り組んでいる子供たちとの間にずれが生じたのは当然であり、世代間格差という問題は徐々に深刻化した。「がんばっても報われない」という気持ちで勉強する若者の数が増えた。これと同時に、物騒な場所や、激しい交通のために危険な場所の数は急速に増え、自由に遊べる範囲が狭くなった。また、マンションのような、プライバシーを厳重に守り、クーラー付きの閉ざされた住居に住むことが一般化した。その結果、個人にとって「社会」というものは自然環境の一部ではなくなってしまった。このように時代の変遷をふりかえって見れば、若い年齢層が親の価値観と自分の価値観の間に感じるずれは非常に根深いものであって、世代間格差によって生じる緊張がたやすく緩和できるものではないことが十分に理解できる（西山2000、山田2004などを参照）。

このような時代の変遷に直面している人間は、それぞれの抱える悩みを表現、あるいは議論する際に、自らの属する「小さい」世界に固有の言語を使用している。そこで、このマイクロ・レベルに現れている議論のパターンや、その背後にあって議論を拘束しているルールなどに十分注意しないと、さまざまな緊張や軋轢とその緩和への道の多様性や複雑さを理解することができない。ここで論じてきた問題、つまり、一昔前の価値観と現状とのずれは、日本社会では西洋諸国以上に痛切に感じられているように思われる。このような傾向の現れの一例として懐古的論調の増加が人目を引く。

5.1.2 マイクロ・レベルの視点

これまでに論じてきた問題を背景にして、人間の帰属意識という重要なテーマを扱った著作として三田誠広の『団塊老人』(2004)を挙げることができる。「息子が就職する頃にはバブルがはじけていて、思うような就職ができなかったり、せつかく大企業に就職しても、途端に会社が倒産の危機を迎える...」(三田 2004: 138) のようなくだりから読み取れるように、三田はこの著作の中で、個人が帰属できるはずのコミュニティーが失われてしまった世の中を描き出す。この問題に直面して、三田は対処戦略として、「個人というものを離れて、大きなものを見据える」ことが大事だと指摘する。その「大きな」ものとはすなわち「文化」であるが、三田のいうところの「文化」とは、伝統芸能、美術、能、歌舞伎、和歌、茶の湯などといったものを意味している。彼はさらに、自国の歴史を代表するこれらの伝統文化は、「故郷を失った」日本人に新たな帰属意識を産み出すことができる(三田 2004: 199-201) と述べている。言葉を変えれば、三田は、マクロの世界である社会的・経済的問題と、マイクロの世界である個人の感情的・精神的ニーズとの間のずれを埋めるための対処戦略として「国」と「文化」の二つの概念を中心に議論を展開しているのである。

5.1.3 他文化の視点

ここでは、「国」と「文化」について詳しく述べることはできないが、このような概念は流動的な概念で、場所、時代、社会によってイメージが異なっているということ、また、これらの概念は正当化とタブー化のメカニズムによって浮かび上がる場合もあり、忌避される場合もあるということなどを指摘するにとどめておきたい。「文化」という観念は、歴史的に見ればヨーロッパ社会に強い影響を与えてきた啓蒙思想とその目的の一つであった「文明国家」づくりの伝統を汲んでいるものである。そのため、現在では、「文化」という概念をずっと広い意味で捉えるべきであると主張する人もいる。たとえば文化人類学の分野では、「文化」とは「生まれつきの遺伝情報とは無関係に、社会化と教育による個々人の知識と知恵とその応用と伝承」(Sünkel 1997) を指している。このような文脈で論じられる「文化」は、文明国家作りの時代に考えられた「大きな、優れた」ものではなく、マイクロ・レベルの個々人の知識と知恵によって醸成される、流動的なものである。

一方、指摘したように、「国」という観念はかなり抽象的なものである。「ふるさと」、「故郷」、「村」、「生まれ育った所」、場合によって「家」、「氏族」などといった観念は、具体的な人間組織と人間関係を想像させてくれる。これに対して「国」というのは一つのアイデアに過ぎないと考える人も少なくない。仮に「国」というアイデアが数多くの人に連帯意識を与え、満足できる生活環境を保障してくれるのであれば、この概念はその役割を理想的に果たしていると言えよう。しかし、世界史の流れから見れば、この概念が真に安定しているものではないことが分かる。ドイツ語圏では、具体的な「Heimat」（故郷、生まれ育った場所）への愛情はあっても、その「Heimat」に対する愛情が「国」という、より大きな対象へと振り向けられたら抽象的になり過ぎるのではないか、というような議論が、現在、続いている。隣のフランスでは、「pays」と「patrie」（「国」と「愛すべき祖国・国家」）という2つの概念が併用されているが、それぞれにドイツ語とはまた違う意味合いがある。

さまざまな社会における個人、小集団、世代群などと、大集団、国家などとの間のつながりは、実質的にみても感情面から考えても異なっているということに注意を喚起したい。マイクロ・レベルの一人の意見である三田の語りに注目すれば、「帰属意識」というものが実際に存在しているものではなく、個々人が絶えず自分がどこに帰属したいかという問題に取り組んでいる一種の模索プロセスなのだということが分かる。その模索プロセスを理解するためにはマイクロの世界の言語を習得することが不可欠なのである。

5.2 宗教的価値観に起因する緊張

5.2.1 問題の所在

宗教とは、人間が自分の行動と思考を決めたり正当化したりするために、自分より力のある想像上の人物、あるいは法則を想定し、この想像上の人物または法則を媒介する人間組織との相互関係を維持することを意味していると言えよう。従って、宗教こそは、マクロ・レベルである思想体系や祭司・牧師・教会・国家が決定する信仰や道徳の基準と、マイクロ・レベルである個々人の具体的な行動と思考との間で、ずれと緊張が表出する領域である。以下では、このマクロとマイクロの関係について、人間の感情が最も直接的に表出する場である母語を題材として調査した結果を紹介したいと思う(Ackermann 2006)。

一回目の調査では、日本人学生に一般的な形で宗教について尋ねた。多くは、お寺と神社はあるが日本には宗教がない、というように答えた。あるいは、世界の思想史などを紹介する資料によれば日本は仏教と神道の国であると答える学生も何人かいた。神道と仏教があるのになぜ「宗教がない」と答える学生がいるのかは、ヨーロッパ人にとって非常に分かりにくい点であった。また、学生たちの多くが、神社へお参りしてそこで何かをお願い

するからといって、そこで万能の神のような強大な権力をもつ何者かが存在していると信じているわけではないと語ったのは驚きに値した。

5.2.2 マイクロ・レベルの視点

このようなことから、宗教について語るためにはマクロ・レベルから始めない方がよいという結論に達し、学生の一人一人に、「目に見えなくても、我々に関わりのあるもの」としてどのようなものを思い浮かべるか、と聞いてみることにした。亡くなった親戚（祖母、祖父、場合によって母か父など）に話しかけたり相談したりすることがあるという回答が数多くかえてきたのには驚かされた。ここからも先祖供養と仏壇（あるいは、実物の仏壇がなくても、その名残）が、やはり今日の日本でも重要な役割を果たし続けていることが理解できた。また、亡くなった人に話しかけると気持ちが落ち着くという伝統も、潜在的な形ではあるが、大事にされていることが分かった。

日本人学生から得た答えに関して以下の二つのことを指摘したいと思う。第一に、実生活における「この世」と「あの世」とのつながりを正確に捉えるには、日本の「宗教」と位置付けられている「仏教」や「神道」などのマクロ・レベルから考えるだけでは不十分である、ということ。第二に、日本人学生たちのマイクロ・レベルの説明を通して、正当化とタブー化という、「文化」を形成する重要なメカニズムが見えてくる、ということである。このメカニズムについて、以下、さらに詳しく説明する。

5.2.3 他文化の視点

日本の歴史の流れにおいて先祖崇拝というものは、家族や地域の構造的安定を保障するために重視され、又、近世の政治的秩序を保障する手段として強調され、正当化されてきた。また、日本社会では、亡くなった人のために供養や各種の儀礼を通して尽くさなければ、祖先は死後の世界でホトケやカミの格まで昇ることができず、「宙ぶらり」になってしまうという考えが普及して、お寺、神社などの教えによって正当化されていると言える。それに対してヨーロッパでは、このような亡くなった人と生きている人の間の関係はあまり見られない。それどころか厳しくタブー視している地域も少なくない。

そこで、ヨーロッパ、日本など、それぞれの社会の仕組みについて考察すると、教会・お寺など、人間の力が及ばない次元を媒介する組織は、特定の考えを正当化またはタブー化し、社会の価値観の安定を図ることによって、その社会に多大な影響を与えていることが分かる。ある牧師の話を一例として挙げてみたいと思う(Dähler 1997)。牧師がマイクロ・レベルの言葉であるスイス・ベルンの方言で書いた日記の中で、父親を突然亡くした女の子を勇気づけたくだりである。牧師は「人知を超えた次元に想定される人物を媒介する」権威者として、かなり厳しい言い方で次のように話した。「お墓のところであつまでもぐず

ぐずすることはない。お父さんはお墓にいるのではない。神様のところからあなたを見ているよ。時間の無駄づかいをしていないで、仕事をしてほしい」。この話から読み取れるのは、教会という組織固有の「あの世」の解釈に立脚する考え方、すなわち、生きている人間は自分の仕事に全力を尽くさなければならない、また、自分の仕事以外の手段を取って死者を幸せにするのはすべてタブーであるという考え方が、信者であるか否かにかかわらず、この社会に根付いているということである。この価値観には効率性が高い面もあれば、お墓へ行きたい子供の感情を否定し、さまざまなフラストレーションを産みやすいという面もあり、長所と短所が絡み合っていると言えよう。

「お墓のところぐずぐずすることはない」と言われた子供が、将来、安定した気持ちの大人になるのか、社会的圧力を感じて悩む大人になるのか、いずれの可能性もある。しかし、「宗教」という抽象概念だけでは「教会」などが正当化する価値観の基準と、個人レベルでの受け方との間にどのようなずれがあるのか、十分に理解できないことは分かる。

マクロ・レベルが正当とタブーの間の線引きに強い影響を与えるのに対し、マイクロ・レベルでは自分で自分に合う価値観を作り出そうとする。そのため、この二つのレベルの間には必然的にずれが生じやすい。私の取り上げた二つのテーマ（「帰属意識」と「宗教」）のほかにも様々な例を挙げることが可能である。例えば、① 正当とされているコミュニケーション・パターンと、マイクロ・レベル（地域、年齢層、特定の政治的考えを支持するグループなど）が要求している、あるいは許しているコミュニケーション・パターンとの間のずれとそれに対する対処戦略、② 子供の教育の厳しさに関する社会的基準と、マイクロ・レベルで見られる、適切と思われている厳しさとの間のずれとそれに対する対処戦略、③ 自信、プライドや社会の信望を保証するはずの仕事・経歴・出世が、望んでいるようにうまくいかない場合の個人的対処戦略、④ 現在、日本で地域生活を困難にする原因となっている、地方交付税の減少、少子化、過疎の進行などに対する地域住民の戦略とアイデンティティー探し（金子 2008）、⑤ 子供の作文や日記類などで見られる自分探しプロセスと不理解に対する対処戦略(Ackermann 1992; Ackermann 2002)、⑥ 外国において、異なる教育を受けてアイデンティティーを形成してきた人、または、複数の文化と言語圏で教育を受けた人が、国家（ネーション）作りの伝統を汲んだ、一国の歴史的文化的流れを基盤とした教育制度に直面した場合の対処戦略、などの例が挙げられる。マイクロ・レベルの「小さい」言語こそが、そのような対処戦略、ストレス解消や問題解決の模索プロセスが進行する領域である、と指摘する必要がある。

6. グローバル化時代の日本語教育を考えて

マクロとマイクロのレベルの関係をこれほど強調したのは、費用、時間、エネルギーのかかる言語教育の目的や、言語教育によって身につけるべき能力をはっきりさせておかな

ければ、全くの趣味でない限り、言語習得の非効率性に対する批判がますます厳しくなってくるためである。その批判に直面して、文化のマイクロ・レベルや、そこで使用されている言語行動の特徴を理解することが如何に重要であるか、ということを経験したい。

仮に、外国人が日本のマクロの世界だけを理解すればよいとするならば、英語のような世界的に通用する言葉でアプローチすることで間に合うかもしれない。しかし、「文化」というものを、様々なマクロ・レベルとマイクロ・レベルの複雑な相互作用が機能している「場」として理解するならば、個々人の無数の対処戦略と、それらによる文化の構造的変化やその不安定さにも目を向ける必要があり、その流動的な「場」の中で個々人が自分の判断力を生かして自分自身の対処戦略を立てていく様子を生で感じ取り、理解するためには「小さい」世界の言語能力が不可欠になってくる。

ここでは、しかし、注意を払うべき点がある。人間の感情や独自性を伝えようとする地域性の強い「小さい」世界の言葉は一種の「私的世界」をなしており、人間にとって「自分のテリトリー」を示す、という点である。Lingua franca（共通語）でない言語を習得することは他人のテリトリーに入り込むことを意味しており、そうするにあたっては、他人のテリトリー、すなわち他人が生活しているマイクロ・レベルを動かしている原動力になっているものを認識する必要があると言えよう。

最後に、複数の文化と言語圏で教育を受けた人（多数の国で生活した人、複数の文化的背景を持つ人など）について触れたい。この範疇に入る人の数が急速に増えつつあるが、多様な背景を持つ人が限定された地域の言語を使用する場合、その言葉づかいは極めて独自のなものになってしまうということは否定できない。ところが、言語教育を含め、そもそも学校教育というものは原則として一つの国家を基準にしているため、その国語の独自の使い方に反感を抱く人が少なくない。複数の文化と言語圏で教育を受けた人がこのような問題に直面したときのストレスに対処する戦略は一体どのようなものだろう、という問題が、ヨーロッパ社会と同様に、今日の日本社会にも生じている。このような多様な文化的背景を持つ人々が日本とどのように向き合っていくのか、また日本が彼らの精神的ストレスをどのように扱っていくのか、そして彼らの存在によって日本がどのように変化していくのか、などをつぶさに見ていくことも、グローバル化時代の日本の在り方を知り、理解するための重要な手がかりとなると言えよう。

以上の論考を次の6点に要約することにより、本稿の結びとしたい。

1. 特定の地域でしか使われていない言語を学習することによって身につける特殊な能力を認識した上で、その学習の目的と目標を的確に立てるべきである。
2. 共通語と、地域の人々の感情や主観性に強く結びついているマイクロ世界の言語の、そ

それぞれの役割を区別した上で、マイクロ世界に関する判断力を継続的に伸ばすべきである。

3. 限られた地域の言語を学ぶことの意味は、小さい世界についての大雑把な情報をキャッチすることにも、また、その小さい世界の文化的本質を探ることにもなく、過去・現在・未来の流れにおいてどんどん変化していくマイクロ・レベル、またその中で具体的な対処戦略を立てている個人、集団、年齢層などについて、より正確な理解を得ることにこそある。

4. マイクロである主体的な個人と、マクロである、より抽象的な政治・経済・教育・宗教などのシステム（また、そのシステムによって正当とされている規範や基準）との間にずれがある。そこで、人間のコミュニケーション相手は「システム」そのものではなく、必ず「対処戦略」を遂行している個人であることを見逃してはいけない。

5. マクロ・レベルとマイクロ・レベルの相互作用、つまり、人の世界観に影響を与えた歴史的環境的要素と、それらに対する主観的な解釈に注意すべきである。

6. 日本で生活しようとする人に対して、生活環境のマイクロ・レベルの流動的な実態を地域の言語を使いながらキャッチできるように指導すること、それと同時に、本人の試行錯誤に、マイクロ・レベルの仕組みを解釈できる専門家からのガイダンスをうまく組み合わせることが必要である。

参考文献

- Ackermann, Peter (1992) "Who am I? Testimonies of silent controversies in Japanese schoolchildren's compositions". In: S.Formanek and S.Linhart (eds.): *Japanese Biographies*. Wien (Oesterreichische Akademie der Wissenschaften), pp. 43-56.
- Ackermann, Peter (2002) 'Self' in *Japanese communication / Selbstwahrnehmung in Japanischer Kommunikation*. Diskussionsbeiträge Erlanger Japanstudien, Nr.12.
- Ackermann, Peter (2006) "Dismantling the East-West Dichotomy – But what happens with Religion?" In: J. Hendry and Heung Wah Wong (eds.): *Dismantling the East-West Dichotomy*. London and New York (Routledge), pp.160-167.
- Bilstein, Johannes; Liebau, Eckart (2003) "Einleitung". In: E.Liebau et al. (eds.): *Natur. Pädagogisch-anthropologische Perspektiven*. Beltz (Weinheim etc.), pp.7-10.
- Dähler, Karl Walther (1997): *Ou das het's ggä*. Licorne (Bern).
- Sünkel, Wolfgang (1997): "Generation als pädagogischer Begriff". In: Liebau, Eckart (ed.): *Das Generationenverhältnis*. Juventa (Weinheim, München), pp.195-204.
- 金子勝 ・ 高端正幸 (2008) 『地域切捨』 岩波書店
- 西山明 (2000) 『少年サバイバル・ノート』 集英社新書
- 三田誠広 (2004) 『団塊老人』 新潮新書
- 山田昌弘 (2004) 『希望格差社会』 筑摩書房